

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督：陳凱歌（チェン・カイコー）
撮影：張藝謀（チャン・イーモウ）
出演：薛白（シュエ・パイ）／王学
圻（ワン・シュエチー）／譚
托（タン・トウオ）

黄色い大地 (黄土地 / Yellow Land)

1984年・中国映画・94分
配給 / パンドラ、ポニーキャニオン

2004 (平成16) 年6月20日鑑賞
〈シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004〉

👁️👁️ みどころ

1984年、「中国映画のニューウェーブここにあり！」と全世界に発信した陳凱歌監督のデビュー作。そのタイトルどおりの荒涼たる中国陝西省北部の黄土を舞台に繰り広げられる、貧しい田舎娘と延安から来た八路軍の文芸隊員との間の心の交流を描くこの映画の衝撃は絶大！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<陳凱歌監督のデビュー作>

第五世代監督の旗手である陳凱歌監督が、1982年に北京電影学院を卒業した直後の、1984年に監督デビューし、世界に衝撃を与えた最も有名な作品がこの『黄色い大地』。そして1985年にロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞し、「中国映画のニューウェーブここにあり！」と世界に知らしめた意義深い作品。私はこの話を何回も聞き、本でもいろいろなもので読んでいたが、劇場でこの映画を観たのはこれがはじめて。そして、今まで私がかかっていたイメージどおりの力強さと美しさに感動！

<2人の主人公>

時代とその舞台は、1939年の中国陝西省北部の田舎村。『黄色い大地』というタイトルがいかにもピッタリする荒涼たる黄土の美しさは圧巻！この田舎村の唯一の恵みは悠々と流れる黄河の水だが、自宅から5kmの道のりをかけて毎日この水を水桶に入れて天秤で担いでいくのは、主人公の少女、翠巧（ツァイチャオ）（薛白 / シュエ・パイ）。

もう1人の主人公は、延安に本拠を構えた毛沢東率いる中国共産党の八路軍から、兵士を鼓舞するため中国の民謡を採集するという任務を与えられてこの村を訪れた文芸隊員の顧青（クーチン）（王学圻 / ワン・シュエチー）。顧青は、父と弟の3人で生活をしている

翠巧の家に寝泊まりしながらこの任務に従事するが、父親は容易に心を開かず、歌も聞かせてくれない・・・。

<娘の嫁入りと赤い服>

昔の貧しい中国の田舎村では、娘の嫁入りは一種の生活のための知恵。年齢や性格の相性、ましてや2人の愛情の有無などは論外で、自分の娘をいかにして、できるだけ生活能力のある男に嫁がせるかが、この時代のこの田舎の父親のテーマ。張藝謀監督の第1回監督作品『紅いコーリャン』でもそうだったが、この映画でも、荒涼たる黄土をバックにして顧青が1人この村にやってくる美しい冒頭シーンの次は、赤い神輿に乗った赤い服を着た花嫁の登場。楽器と歌ではやし立てられながら、嫁ぎ先に入っていき娘の嫁入り姿が楽しげに描かれている。顧青は村人と共にこの婚礼の式に入って酒を飲み、食事をしながら歌を集めようとしていたが、嫁入りの様子をじっと横から見ていたのが翠巧。それは、いずれ近いうちに、自分にも同じ運命が待ち受けていることを知っていたからだ。

<顧青の生き方は刺激的なもの！>

翠巧たち家族はもちろん字も読めないし、その生活は貧しく、生きていくことだけで精一杯。そんな中に突然入り込んできた顧青は、お役人でありながら貧しい生活に溶け込んで、畑仕事を手伝ったり、男のクセに針仕事までこなす新しい時代をイメージする魅力的な男性。そして顧青から聞く話では、八路軍の本拠地のある延安では、女も文字を書くし、教育まで受けることができるうえ、髪を短く切って八路軍に入る娘もいるとのこと。さらに驚きは、男女の結婚もこの田舎の風習とは異なり、2人の気持が大切だというもの。さらに顧青は、時代はこれから大きく変わっていくと熱っぽく翠巧に対して語った。「自分もそんなところに行けたら・・・」、翠巧の心の中に一瞬そんな気持が広がったのも当然だろう。

<しかし現実は何？>

しかしそんな中、現実は一層厳しく、明日は延安に戻らなければならないと告げる顧青。そして翠巧の父親は翠巧に対して、少し年寄りだが、安心できるという男の家に嫁ぐよう「命令」・・・。延安に戻る顧青に対して、翠巧は自分も八路軍に入る決心をしたことを打ちあげた。そしてこれに対して顧青は翠巧が嫁ぐ日までに必ず迎えにくると約束したが・・・。

<嫁ぎ先を逃げ出した翠巧は・・・？>

今日はいよいよ嫁入りの日。映画の最初に登場した嫁入りシーンと同じスタイルで同じ道を進んでいく翠巧。しかし嫁ぎ先の家に入った翠巧を待っていた男は・・・？ここからのストーリーは涙を誘う悲しいもの。無力な少女にできることなどは何もない。勝手に実

家に戻って生活するわけにはいかないのも当然。翠巧にできることは、ただ嫁ぎ先を逃げ出して、自力で黄河を渡り、八路軍へ参加することだけだった。姉に代わって黄河に水を汲みに来ていた弟と共に実家の前まで帰った翠巧は、バッサリと切ったお下げ髪を弟に手渡すとともに、父への想いを弟に託し、1人小さな舟を漕いで黄河を渡ろうとしたが・・・？

<実感する田舎の貧しさ>

この映画では、中国の田舎村の貧しさが大きなテーマ。百姓の父親が語る、長年続いてきた田舎の習慣や、「食えなければ愛情も関係ない」と語る言葉にはそれなりの説得力がある。そして、雨が降らなければ作物が育たず、百姓が飢えてしまうこともたしか。ところが、そんな時に彼らにできることは雨乞いの行事しかない。顧青が入ってきた田舎村の貧しさが本当に実感される。そして、共産党はそんな貧しさから人々を解放するのだと語る顧青の理想にも十分な説得力がある。

またこの映画では歌が大きなウエイトを占めているが、共産党の本拠地の延安で、太鼓や鐘をうち鳴らしながら踊り歌われる強烈なリズムと、この田舎村で翠巧が歌う歌やその父親が顧青との別れの日になってやっと歌う切々とした民謡との対比も面白い。1984年につくられたこの映画が、一種のミュージカル映画のような趣があることにビックリ！

<思わず思い出した『初恋のきた道』>

この『黄色い大地』は、1985年のロカルノ国際映画祭銀豹賞等を獲得したが、それに続いて1988年にベルリン国際映画祭で金熊賞を獲得したのが、張藝謀監督の『紅いコーリャン』(87年)。「紅いコーリャン」は、姜文と鞏俐の2人を1980年代を代表する俳優として世に登場させたが、この『黄色い大地』の主人公の薛白と王学圻は、それほど有名となったわけではない。しかし「中央」から来た若いハンサムな男性と田舎村の娘という役柄、そして中国映画特有の赤い服から、そのイメージが共通するのが、張藝謀監督の代表作の1つである『初恋のきた道』(00年)。もちろんストーリーは全然違うが、田舎に住む純朴な赤い服を着た若い娘が、知識ある中央の青年と知り合うことによって生まれてくる新たな男女の関係というパターンは少し共通するものがある。もっともこの『黄色い大地』はハッピーエンドで終わるものではなく、むしろ悲しい結末を暗示させて終わる作品だが・・・。

<最近の陳凱歌監督は・・・？>

私が観た最新の陳凱歌監督の作品は『北京ヴァイオリン』(03年)で、これは本当に涙を誘うすばらしい作品だった。もっとも、彼は、その前は、『キリング・ミー・ソフトリー』(02年)をつくってハリウッドへの進出を目指したが、何らかの心境の変化(?)があつてまた原点に戻り、『北京ヴァイオリン』を監督したのではないかと思われる。これに対

して同じ陳凱歌監督と同期生で第5世代監督を代表する張藝謀監督は、『HERO（英雄）』（03年）に続いて04年8月に公開される『LOVERS（十面埋伏）』でも、CG（コンピューター・グラフィックス）とワイヤーアクションをふんだんに使ったハリウッド型大作映画にのめり込んでいる（？）様子。しかし私は、このような最近の張藝謀監督の作品には批判的。陳凱歌監督には、今後もこの『黄色い大地』や最新の『北京ヴァイオリン』のような、中国人監督しかつけない本物の中国映画をつくってもらいたいものだ。

2004（平成16）年6月21日記